高嶺格《いかに考えないか？》整理・保存

公益財団法人山口市文化振興財団　山口情報芸術センター

概要／課題

高嶺格のパフォーマンス作品《いかに考えないか》（2010年～）は、観客がタッチパネル式キーボードを通じて、スクリーンの向こう側にいるパフォーマーに指示を出し、その指示に応じてパフォーマーが即興的に影絵をつくり出すパフォーマンス作品。
タッチパネルや合成音声を使用しているため、作品の構成要素が老朽化しており、この事業では、作品の再演に向けたメンテナンスやインストラクションの作成などを進め、作品を後世に受け継がれるような取り組みを進めた。

体制／手法

YCAMを中心にチームを編成

目録作成：石井栄一、廣田祐也、金子美和、渡邉朋也（YCAM）
作品のメンテナンス：石井栄一、廣田祐也、中上淳二（YCAM）
ヒアリング調査：渡邉朋也（YCAM）

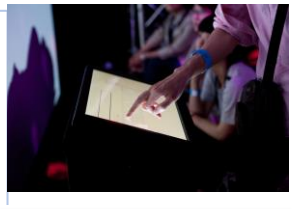
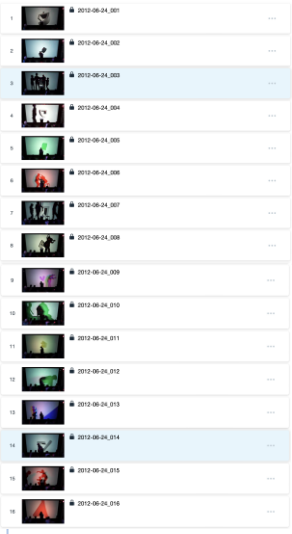
助言

＜アーティスト＞
高嶺格

＜顧問弁護士＞
シティライツ法律事務所

成果

（成果物）
- 作品のメンテナンス
- 過去のパフォーマンスの記録の整理
- 作品設置時のテクニカルライダーの作成

（公開）
2023年に山口の市街地での発表を検討中

（社会・産業に向けての意義／見込まれる社会的利用）
この作品はメディアアート系のインスタレーション作品とパフォーミングアーツ作品の要素を併せ持つ作品であるうえ、鑑賞者も出演者もいずれも参加型である点に特徴があり、そのため一般的なパフォーミングアーツ作品と異なり、劇場ではない空間でも上演が可能、また上演時間が可変で、独特な間口の広さを持っている。作品のインストラクションを準備し、運用しやすくすることで、さまざまな地域で比較的低いコストで上演が可能になると見込んでいる。YCAMでは、山口市の市街地での上演を計画しており、商店街で開催される文化系イベントなどと合わせて賑わいづくり、文化的街づくりに結びつけようとしている。
また近年、こうしたインスタレーション作品とパフォーミングアーツ作品が複合するタイプの作品が現代美術領域で増加する傾向にあり、こうした作品の今後の運用の参照点となるよう作業を試みた。